

【論文】

「笑い」の分類に基づく数量的分析

早川 治子

A Statistical Analysis of Laughter Based on Classification

Haruko HAYAKAWA

「笑い」の談話機能による3種の分類 A類：仲間づくり、B類：バランス、C類：覆い隠し と「笑い」が付加された発話の属性とのクロス分析を行った結果、「親疎」関係において、A類の「笑い」は親しい間柄に多出し、B類は「普通」の間柄に多出する。場面属性においてはA類は雑談、B類はミーティングに多出する。「年齢」関係においては、A類は同年齢の者に対して、B類は自分より年上の者に対して、多く出現することが数量的に実証された。

キーワード：笑い、年齢、親疎、場面、分布

はじめに

本稿の目的は前稿早川(2000)において試みた分類仮説に基づき「笑い」と発話の属性との共起関係を実際のデータの数量的分析からその分布特徴を実証的に探ることにある。対象データ上の「笑い」すべてを対象とし(注1)その発話場面、発話者の属性の特徴を探ることは早川(1999)ですでに試みられているが、今回は「笑い」を分類仮説に基づき、A、B、C、3種、さらにそれらの下位区分、A、3種、B、3種、C、2種に分類し、それらの分布状況を属性とクロス集計し、比率を見る。それにより、A類、B類、C類の分布形態の差を示し、分類仮説の例証とすることが主眼である。理論的かつ実証的な総合的考察を行うことにより「笑い」の対人相互関係における意味を探りたいと考えたからである。

まず1において分類仮説について概説する。(注2)次に、2においてデータの属性の概要、3において分類仮説とデータ属性とのクロス分析結果を述べる。

1. 分類仮説の概要と分類基準

1.1. 分類仮説の概要

早川(2000)では自・他の相互行為としての「笑い」の機能について、データ内に現れた「笑い」を、自己の領域と他者の領域への出入りの視点から分析し、A類、B類、C類3種に分類した。それらはその談話機能の特徴からA類：仲間づくりの「笑い」、B類：バランスをとるための「笑い」、C類：覆い隠すための「笑い」と名づけられた。それらは再度それぞれの発話内容の所属する領域により、A類はA 1：共有期待の「笑い」(自分の話題に誘い込むときの「笑い」)、A 2：共有表明の「笑い」(相手の話題に同意するときの「笑い」)、A 3：共通認識確認の「笑い」(「楽屋落ち」のようなわかっている者にだけわかる「笑い」)に下位区分された。B類はB 1：自己の「恥」「照れ」による「笑い」、B 2：相手に対する「厚かましさ」による「笑い」、B 3：儀礼的「笑い」に下位分類された。C類はC 1：自己の話題に対する「ごまかし」の「笑い」とC 2：相手の話題に対する「とりあえず」の「笑い」に分類された。以下にその例をあげて、説明する。

A：仲間づくりの「笑い」= 談話促進の「笑い」

この種の「笑い」は親しい人々の間で頻繁に出現するものであり、まずA 1の「笑い」で会話参加者のうち、新情報の提供者、働きかける側が自分の領域にある楽しいと思っていることを提供し、相手が自分の楽しさを共に享受することを期待しながら笑う。それに対し、相手、つまり情報の受け手が情報の提供者の領域にある楽しいことにA 2の「笑い」で共

「笑い」の分類に基づく数量的分析

有表明をしつつ笑う。または両者がA 3の「笑い」で共通認識に基づき、同時に笑う。このようにして場面が盛り上がり、相互の親しさが緊密になる。

A 1：自分の楽しいと思うことに付加され、談話参加を促す「笑い」
= 話題の共有期待の「笑い」

自分の楽しいと思うことを談話場面に提供し、相手にもその話題を共有してほしい時、「笑い」を発話に付加する。会話例1において新情報の提供者であり、話題の導入者Aが「笑い」によって場面を盛り上げている。話題の共同参加者Bに自己の領域にある楽しさを共有することを期待している。Aは自分の子どもとその保育園の先生のいい関係について述べている。「笑い」によってAはBを自己の領域に招き入れると同時にその楽しさを共有し、会話を協動的に展開し、より親しい関係にしている。

_____部分がA 1の「笑い」である。_____が後に説明するA 2の共有表明の「笑い」である。

例1

- 1 A 笑い もうホントにいい先生がいるのよねえ。
- 2 B ふーん
- 3 A それで、もう、うちの子供なんか、恋をしてる程大好きで、
「だいしゅき、だいしゅき」とかゆっ 笑い
- 4 B 笑い かわいいー 笑い

A 2：相手の考えを共有し、会話に参加する「笑い」
= 共有表明の「笑い」

「笑い」によって相手に対する話題の共有を表し、談話を協調方向に持っていくことがある。会話例1ではAが自分が楽しいと思っている新情報を提示し、Bがそれにあいづち、または「かわいいー」と感嘆を表す形容詞 + 笑い で応答している。

話題の導入者は新情報をA 1の「笑い」とともに提出し、話題の共同参加者は同意または感嘆を表す表現（かわいいー、ほんとー、すごーい、そうそう等）とともにA 2の「笑い」を出すことが多く観察された。

A 3：共通の背景を確認する「笑い」= 共通認識確認の「笑い」

A 1, A 2のペアが繰り返され、共通の領域が確認されると両者が同時に笑うことが観察される。しかし前提条件としてペア発話がない場合でも、互いに共通理解があれば両者が同時に笑うこともあり、また一方が共通理解を示唆して笑うこともある。これがA 3の「笑い」である。

例2

- 1 A でも、わたしなんか、なんか、あの、よくあるじゃないですか。お見合いの時に聞かれる、あれのような心境になって。 笑い
- 2 B 興信所みたいな。 笑い
- 3 A 笑いながら なんか、よく、ほら、わたしもそういう年になってきたのかなと思っちゃって 笑い

Aが「あれのような」と互いに既知である情報を示唆し、互いの共通理解に基づく同意の期待を示すことにより、BはAの発話を補足するような発話と「笑い」で応じて談話が進行している。この種の「笑い」には話し手と聞き手の話題の背景であるバックグラウンドが共有されている。それだけでなく、それを「笑い」で確認することにより参加者二人の一体化が促進され、世界を二人で共有することにより仲間意識を高め、その結果、反対に仲間以外の世界にと閉じていくものもある。わかっているものだけに通じる「笑い」、いわゆる「楽屋落ち」のような「笑い」である。

会話例3もこの「笑い」である。

例3

- A 今出まーすつつって。
- B 今出るって。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

A / B そば屋の出前 笑い

B 知ってる？（Cに向かって）何でもね、今、今やりますとかね、今、行っ、行ったばかりですとかね。そういうふうにね、嘘つくっていかね、そういういいわけするのをね、そば屋の出前っていうの。日本語で。

会話例3では、A、Bが出前の遅いそば屋に電話して、その返事について笑っている。しかし、A、B二人だけで共通理解を確認して笑ってしまったため、その場に居合わせた外国人Cを疎外してしまった。そのため、その内容を説明して、Bを仲間に取り込もうとしている。

通常談話は参加者が発話の順を交互に取り、複数の参加者が同時に発話することは破格と見なされ、同時発話が行われそうになった場合は、互いに順を譲り合う。しかし、「笑い」の場合、同時発話が許容される。今回のデータにおいて複数話者による発話45件のうち40件、88.9%が「笑い」である。これらはA 3に属するものと考えられる。

B：バランスをとるための「笑い」=緊張緩和

自己の領域にある恥ずかしいこと、プライバシーに属することを開陳する際に笑うことがある。いわゆる「照れ」笑いである。また自己の領域から相手に意見、要求を出していく際にも笑う。挨拶、謝罪などにもこの「笑い」を伴う。これらは一見A仲間づくりの「笑い」に似ているが、意図的にA仲間づくりの「笑い」に擬して、疑似仲間を作る社会的色彩の強い「笑い」である。

B 1：自分の領域に属する内容に付加された「笑い」=恥または照れによる「笑い」

自己の領域に属することがらでも、表明することに抵抗のあることに「笑い」を付加する。

例4

1 A 結局、あの一、やっぱり年ですね。ぼけちゃってね。だめなんですよ。 笑い

2 B ねえ、先生が年だなんておっしゃたらねえ。

会話例4では発話者Aが自分の年老いたこと(恥ずかしいこと)を「笑い」とともに開陳している。ここに「笑い」がなかったとすると、深刻な場面になるが「笑い」によって場面の深刻化を防いでいる。つまり事実の深刻さを笑うことによって緩和し、バランスをとろうとしている。

会話例5は年齢を尋ねられたBが照れて笑っている場面であるが、これも自分のプライバシーを他人に開示するために、照れて笑っていると考えられる。

例5

1 A Bちゃん、まだ22歳だっけ。

2 B 来年で 笑い、23でーす。 笑い

B 2 : 相手領域に踏み込むことに付加された「笑い」=厚かましさによる「笑い」

話者が相手に対する意見、命令、要求、依頼、提案を行うことがある。これは自分のプライベートなことではなく聞き手、つまり相手領域に属することである。その場合、話者は自分が相手領域に入り込み、相手のプライバシーに抵触する意見を言うこと、相手の判断を促すこと、相手の行動を促すこと等による緊張、厚かましさの認識を和らげる、緩和するために笑う。

会話例6は、職員室での教員同士の会話である。教師Aが同僚の教師に学生に教室内の机を下げない(動かさない)ように伝えてほしいと要求する場面であるが、Aが相手に要求する行為を厚かましい、恥ずかしいと認識し、それを和らげるために「笑い」が用いられている。

例6

1 A でも間違えて机下げちゃったりなんかすると大変ですよ。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

笑いながら なぜかとゆうと、月曜日の1時間目、わたしの授業なの。笑い だから下げないように、戻すように 言っといってください。笑い

会話例7 職員室に来た言い方のはっきりしない学生に対する教師の命令発話であるが、内容の厳しさを和らげるために笑っている。

例7

1 A はっきり、はっきり思っていることをいう。笑い

提案表現とともに現れることも多い。

例8

1 A じゃあ、この、点滅ってゆうふうにかー、ファジーな表現がいいんじゃないですか。笑いながら

以上のようにB 2の「笑い」は要求表現、命令表現、提案の表現等とともに現れ、内容の厚かましさを、厳しさを緩和する働きをする。

B 3：挨拶に付加された「笑い」=儀礼的「笑い」

この「笑い」は前述のA：仲間作りの「笑い」に似ているが、これはAの「笑い」の基になる親しさ、楽しさを必ずしも共有する必要がない点が異なる。もともと仲間でない相手を「擬似仲間」として関係づけることもできる「笑い」である。

例9

A あーそうですか。有り難うございます。笑いながら

こんにちは、さようなら等の挨拶表現、ありがとう、どうも等の謝礼表現、すみません、ごめんなさい、どうも等の謝罪表現とともに起こる「笑い」である。

C：覆い隠すための「笑い」=会話継続

言いたくない、またはうまく言語化できないとき、とりあえず笑うことがある。これにより、発話者は意見を表明せず、つまり自己開示しないが、会話は継続する。話題終了時のマーカーとして現れる「笑い」もこの種のものであり、この「笑い」が繰り返され、会話は終了する。

C 1：言いたくないことを隠すための「笑い」=ごまかしの「笑い」

はっきり言いたくない内容を笑ってごまかして表現しない場合がある。

例10（職員会議で）

- 1 A あと進路ニュース（間）は一、ほんとはもうちょっと違うこと書こうと思ったんですけどスペースの問題とかいろいろあって一、きょうは一、この内容で一、笑い、とゆうぐらいで一、また継続して出して行きます。

例11

- 1 A あるんですよ。いろいろと。
2 B はあ
3 A 笑いながら いろいろと・・・

会話例10では「きょうはこの内容で（我慢して／勘弁してください）」というところを「笑い」で代用している。

例11でも「いろいろと（ある理由）」を開示せず、ごまかしている。

C 2：反応の仕方がわからないための「笑い」=とりあえずの「笑い」

言いたくない内容をごまかすためではないがどう反応していいかわからず、とりあえず反応しておこうという場合にも「笑い」が使われる。

例12

- 1 A だからそれがすけてんのよ。
2 B 笑い

「笑い」の分類に基づく数量的分析

- 3 A もう、パンツ見える？
- 4 B 見えてるね。
- 5 A こおんな、いいよ、もうここだけだから。
- 6 B はは 笑い
- 7 A 出るときスカートはくからさ。
間7秒
- 8 B ともかくあれをやっちまわないと、うんん。 咳ばらい
間28秒

例12はAがBに自分のスカートが透けてパンツが見えるかどうかと聞いている場面であるが、Bは話題に積極的に参加するわけでもないし、参加を拒否しているわけでもない。しかし協調的フィラーとして「聞いています。あなたとコミュニケーションのチャンネルを切ることによりあなたと敵対関係になりたくない」というメッセージを出している。

1 2 . 分類認定基準

データを「笑い」が付加されている発話の談話特徴に基づき、A類、B類、C類およびその下位分類に以下のような作業上の認定基準を設け、ラベル分けを行った。

- A 1:発話者が自分の楽しいと思う、新しい談話のトピックの提供者であり、主として談話の展開をリードする者である。
- A 2:発話者が提供者によって導入された談話トピックの追従者である。
- A 3:発話者（達）が未だ明確に導入されていない話題について笑っている場合。
- B 1:発話者が自己のプライバシーと考えられること（年齢、体重、失敗等）について話している場合
- B 2:発話者が相手のプライバシーに立ち入ったと考えられることに言及している場合、例えば、相手に対して意見を言う、相手に何かをさ

せる等。B 3:発話者が挨拶をしている場合。例えば、はじめの挨拶、感謝の挨拶、謝罪等。

C 1:発話者が話すべきときに、はっきり言わない場合。例えば質問に答えない等。

C 2:談話の追従者である発話者が談話の先導者の提出したトピックに対して自己の立場を明確にしない時。

上記のものが認定基準である。しかしながらいくつかのファジーなケースも考えられる。例えば、A 1とB 1の区分、A 2とC 2の区分においてである。前者のケースにおいて、例えば楽しい内容、プライベートな内容というのはかなり主観的な判断を伴う。年齢に関して話すということはある話し手にとっては楽しいことであるが、ある話し手にとってはプライベートなことである。今回の分析においては自己の年齢、体重、失敗といった一般的にプライベートと考えられることに関してはB 1に入れた。後者のケースにおいては両者ともトピックが相手によって導入されている。A 2の場合は発話者はそのトピックが談話のトピックとなることを了承しているが、C 2の場合は了承していない。そのためA 2の場合は「笑い」が「そうね」、「いいなあ」、「すごいなあ」という肯定的な感情表現とともに現れる傾向にあり、一方C 2の「笑い」は謝罪への返答、何か戸惑わせるものに対する返答として現れることが多い。

2. データの属性の概要

分析対象となるデータは、現代日本語研究会編「女性のことば・職場編」に収録された自然談話資料発話のうち前半10人の協力者によるテープ録音の書き起こし発話5998件である。「笑い」は 笑い、笑いながら、ははは というようにさまざまな形で入力されており、総数422件であった。これらを「笑い」の類別と発話属性とでクロス分析を行った。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

2 1 . 資料および発話属性

3 1 . 資料は、それぞれに以下の例のように、発話属性が付けられている。

資料サンプル

行番号	発話	資料コード	調査日	場面1	場面2	場所	直前文の話者との関係
4161	私も思いましたよ	15	1993年10月	朝	打ち合わせ	室内	同人

発話者性	発話者年齢	発話者職業	発話者職種	発話者役職	相手性	相手年齢	相手職業	相手職種	相手役職	性別関係
女	30代	会社員	社員教育・講座企画運営他	?	女	30代	会社員	社員教育・講座企画運営他	?	同

年齢関係	職場関係1	職場関係2	職階関係	入社年関係	つきあい年関係	接触量関係	会話量関係	親疎関係
同	同僚	同室	同	後	～1年	多々	多	親

今回の分析対象の発話者として資料の前半の01から10の協力者を選んだ。また属性としては親疎関係、場面2、年齢関係に注目した。

2 2 . 属性の概要

「親疎関係」は、「親親」、「親」、「普通」、「疎」、「疎疎」とあらかじめ5つのカテゴリーを設けておき、協力者に主観的に判断してもらったものである。

場面2は「雑談」、「打ち合わせ」、「会議」というように談話の内容による分類である。それぞれの談話内容に対するラベル付けは個々の共同研究者によって異なる。例えば「雑談」、「工作中的雑談」、「電話での雑談」、「相

談」、「会議」、「小会議」、「大会議」と17項目もの多岐に渡る。そのため場面2を「雑談」と「ミーティング」の2種に分けた。つまり「雑談」は「雑談」と「工作中的雑談」、「電話での雑談」等、「雑談」と名づけられたものすべてを含む。「ミーティング」は「雑談」以外の「ミーティング」、「相談」、「会議」等を含む。

「年齢関係」は発話者に対して相手が上か下かということの意味する。発話者に対して20歳以上、年上の場合を「上上」、5から19歳上の場合を「上」、4歳上から4歳下までを「同」、5歳から19歳下までを「下」、20歳以上下の場合を「下下」としてある。

3. 分析結果

「笑い」発話を認定基準に基づきA類、B類、C類とその下位分類にラベル分けし、その後それぞれの属性とクロス分析を行った。

3 1. 類別の「笑い」の度数および比率の比較

表1 1はA類、B類、C類およびその下位分類A 1、A 2、A 3、B 1、B 2、B 3、C 1、C 2に分類された「笑い」の度数と比率を示す。

表1 - 1：類別の「笑い」の度数と比率

類	A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	*	#	「笑い」 総計	その他 総計	すべての 発話の 総計
小計	158	71	70	33	44	14	8	10	9	5	422	5576	5998
計	299			91			18		9	5	422	5576	5998
小計%	2.63%	1.18%	1.17%	0.55%	0.73%	0.23%	0.13%	0.17%	0.15%	0.08%	7.04%	92.96%	100.00%
計%	4.98%			1.52%			0.30%		0.15%	0.08%	7.04%	92.96%	100.00%

*は会話の内容が理解できないことを示す。

#は録音テープの音が不明瞭であることを示す。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

表 1 1の結果はA類の発生比率はB類に比べて3倍近く、C類に比べて16倍に上っている。またB類もC類に比べると5倍に上っている。これに互いに従属な比率の差の検定を行うと表 1 2のように5%の危険率で有意となった。

表 1 - 2 : A類、B類、C類間の比率の差の検定

A	B	A - B	Z 値
4.98%	1.52%	3.46%	10.53 > 1.96
A	C	A - C	Z 値
4.98%	0.30%	4.68%	15.77 > 1.96
B	C	B - C	Z 値
1.52%	0.30%	1.22%	7.00 > 1.96

つまり最もよく出現する「笑い」はA類であり、次にB類、C類の順であることが確認された。

3 2 .「笑い」の類別と相互関係の相関

3 2 1 .「親疎」関係

表 2 1は「笑い」の類別と「親疎」関係をクロスした度数分布表である。

「文学部紀要」文教大学文学部第14 2号 早川治子

表2 - 1 : 「親疎」関係と「笑い」の2元表

「親疎」 関係	親々		親		普通		疎		疎々		?	計		
	親々	%	親	%	普通	%	疎	%	疎々	%				
A 1	51	3.21%	16	2.25%	42	3.79%	0	0.00%	0	0.00%	49	2.38%	158	2.63%
A 2	16	1.01%	6	0.84%	12	1.08%	0	0.00%	0	0.00%	37	1.80%	71	1.18%
A 3	15	0.94%	10	1.40%	5	0.45%	1	2.56%	0	0.00%	39	1.90%	70	1.17%
B 1	8	0.50%	0	0.00%	14	1.26%	0	0.00%	2	0.64%	9	0.44%	33	0.55%
B 2	12	0.75%	3	0.42%	10	0.90%	0	0.00%	2	0.64%	17	0.83%	44	0.73%
B 3	2	0.13%	1	0.14%	2	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	9	0.44%	14	0.23%
C 1	2	0.13%	0	0.00%	2	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.19%	8	0.13%
C 2	2	0.13%	0	0.00%	2	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.29%	10	0.17%
*	2	0.13%	1	0.14%	1	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.24%	9	0.15%
#	1	0.06%	1	0.14%	1	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%	5	0.08%
「笑い」 総計	111	6.98%	38	5.34%	91	8.21%	1	2.56%	4	1.29%	177	8.60%	422	7.04%
その他 総計	1479	93.02%	674	94.66%	1017	91.79%	38	97.44%	311	98.73%	2057	92.08%	5576	92.96%
すべての 総計	1590	100.00%	712	100.00%	1108	100.00%	39	100.00%	315	100.00%	2234	100.00%	5998	100.00%

? は「親疎」関係がデータに記入されていないことを表す。

それぞれの類別と親疎関係の相関を概観するために類別をA類、B類、C類の3類に統合し、「親疎」関係を「親親」+「親」、 「普通」、 「疎」 + 「疎疎」の3種に統合し、表2 - 2の2元表を作成した。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

表 2 - 2 : 「親疎」関係と「笑い」の統合 2 元表

類別	親々 + 親	%	普通	%	疎 + 疎々	%	計	%
A 1 + A 2 + A 3	178	7.73%	59	5.32%	1	0.28%	238	6.32%
B 1 + B 2 + B 3	26	1.13%	26	2.35%	4	1.13%	56	1.49%
C 1 + C 2	4	0.17%	4	0.36%	0	0.00%	8	0.21%
「笑い」総計 L	208	9.04%	89	8.03%	5	1.41%	302	8.02%
その他総計	2094	90.96%	1019	91.97%	349	98.59%	3462	91.98%
総計	2302	100.00%	1108	100.00%	354	100.00%	3764	100.00%

この結果、A類、B類の親疎における分布を見ると、A類は「親親」+「親」に多く現れ（「親親」+「親」：「普通」：「疎疎+疎」=7.73%:3.32%:0.28%）、B類は「普通」と認識される関係に多く出現する「笑い」であり（「親親」+「親」：「普通」：「疎疎+疎」=1.13%：2.35%：1.13%）それぞれ分布形態の違うことを示す。

A類、B類および「親親」+「親」、「普通」の部分（表 2 - 2 の太線部分）の χ^2 検定を行った結果、 χ^2 検定値は12.85であり、自由度1の χ^2 統計量の5%臨界値は3.84あるから有意の相関が認められた。

またA類と「親親+親」、「普通」それぞれの比率の差の検定結果は以下の表 2 - 3 のようである。

表 2 - 3 : A類と「親疎」関係間の比率の差の検定

		普通
		59 (5.32%)
親々 + 親	178 (7.73%)	* 2.59 > 1.96

結果、検定値は2.59であり、5%有意水準の臨界値1.96よりも大きい。つまり、A類においては親しい関係に出現する「笑い」のほうが普通の関係

に出現する「笑い」より多いことが確認された。

B類と「親親+親」、「普通」それぞれの比率の差の検定結果は以下の表2-4のようである。

表2-4：B類と「親疎」関係間の比率の差の検定

		普通
		26 (2.35%)
疎疎+疎	26 (1.13%)	*2.72 > 1.65

結果、検定値は2.72であり、5%有意水準の臨界値1.65よりも大きい。つまり、B類においては普通の関係に出現する「笑い」のほうが親しい関係に出現する「笑い」より多いことが確認された。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

3 2 2. 「場面 2」

「場面 2」と「笑い」の 2 元表は以下のようである。

表 3 - 1 : 「場面 2」と「笑い」の 2 元表

	雑談	%	ミーティング	%	?	%	計	%
A 1	137	4.65%	21	0.69%	0	0.00%	158	2.63%
A 2	61	2.07%	10	0.33%	0	0.00%	71	1.18%
A 3	48	1.63%	22	0.72%	0	0.00%	70	1.17%
B 1	11	0.37%	22	0.72%	0	0.00%	33	0.55%
B 2	12	0.41%	32	1.05%	0	0.00%	44	0.73%
B 3	12	0.41%	2	0.07%	0	0.00%	14	0.23%
C 1	6	0.20%	2	0.07%	0	0.00%	8	0.13%
C 2	6	0.20%	4	0.13%	0	0.00%	10	0.17%
*	7	0.24%	1	0.03%	1	6.25%	9	0.15%
#	4	0.14%	1	0.03%	0	0.00%	5	0.08%
「笑い」総計	304	10.32%	117	3.85%	1	6.25%	422	7.04%
その他総計	2641	89.68%	2920	96.15%	15	93.75%	5576	92.96%
総計	2945	100.00%	3037	100.00%	16	100.00%	5998	100.00%

それぞれの類別と場面 2 の相関を概観するために類別を A 類、B 類、C 類の 3 類に統合し、表 3 2 の統合 2 元表を作成した。

表 3 - 2 : 「親疎」関係と「笑い」の統合 2 元表

	雑談	%	ミーティング	%	計	%
A 1 + A 2 + A 3	246	8.35%	53	1.72%	299	4.98%
B 1 + B 2 + B 3	35	1.19%	56	1.82%	91	1.52%
C 1 + C 2	12	0.41%	6	0.20%	18	0.30%
「笑い」総計	304	10.02%	117	3.74%	408	6.80%
その他総計	2641	89.98%	2920	96.26%	5590	93.20%
総計	2945	100.00%	3037	100.00%	5998	100.00%

この結果、A 類、B 類の場面における分布を見ると、A 類は「ミーティン

グ」場面に比して「雑談」場面に5倍近く多く現れ(「雑談」 : 「ミーティング」=8.35% : 1.72%)、B類は「雑談」よりも「ミーティング」に比較的多く出現する(「雑談」 : 「ミーティング」=1.19% : 1.82%)。A類、B類2種(表3-2の太線部分)の χ^2 検定を行った結果、 χ^2 検定値は66.50であり、自由度1の χ^2 統計量の5%臨界値は3.84であるから有意の相関が認められた。

またA類における「雑談」と「ミーティング」の比率の差の検定結果は以下の表3-3のようである。

表3-3 : A類と「場面2」の比較の差の検定

		ミーティング
		52 (1.72%)
雑談	248 (8.35%)	*11.73 > 1.65

結果、検定値は11.73であり、5%有意水準の臨界値1.65よりも大きい。つまり、A類においては「雑談」に出現する「笑い」のほうがそれ以外の場面に出現する「笑い」より多いことが確認された。

B類と「雑談」、「ミーティング」それぞれの比率の差の検定結果は以下の表3-4のようである。

表3-4 : B類と「場面2」の比率の差の検定

		ミーティング
		56 (1.82%)
雑談	35 (1.19%)	*2.07 > 1.65

結果、検定値は2.07であり、5%有意水準の臨界値1.65よりも大きい。つまり、B類においては雑談以外の場面に出現する「笑い」のほうが「雑談」場面に出現する「笑い」より多いことが確認された。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

3 2 3 . 「年齢」関係

同じくそれぞれの類別と「年齢関係」の相関の統合 2 元表を作成した。

表 4 - 1 : 「年齢」関係と「笑い」の 2 元表

	上上	%	上	%	同	%	下	%	下下	%	?	%	計	%
A 1	11	2.86%	19	2.04%	55	4.05%	31	2.67%	5	1.32%	37	2.08%	158	2.63%
A 2	6	1.56%	7	0.75%	12	0.88%	12	1.03%	0	0.00%	34	1.91%	71	1.18%
A 3	5	1.30%	9	0.97%	12	0.88%	4	0.34%	5	1.32%	35	1.96%	70	1.17%
B 1	2	0.52%	14	1.50%	3	0.22%	6	0.52%	0	0.00%	8	0.45%	33	0.55%
B 2	3	0.78%	8	0.86%	9	0.66%	7	0.60%	2	0.53%	15	0.84%	44	0.73%
B 3	1	0.26%	2	0.21%	2	0.15%	1	0.09%	0	0.00%	8	0.45%	14	0.23%
C 1	0	0.00%	0	0.00%	2	0.15%	1	0.09%	1	0.26%	4	0.22%	8	0.13%
C 2	0	0.00%	3	0.32%	1	0.07%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.34%	10	0.17%
*	1	0.26%	1	0.11%	1	0.07%	0	0.00%	2	0.53%	4	0.22%	9	0.15%
#	0	0.00%	1	0.11%	1	0.07%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.17%	5	0.08%
「笑い」 総計	29	7.53%	64	6.66%	98	7.07%	62	5.33%	15	3.95%	154	8.25%	422	7.04%
その他総 計	356	92.47%	867	93.34%	1259	92.93%	1101	94.67%	365	96.05%	1628	91.75%	5576	92.96%
総計	385	100.00%	931	100.00%	1357	100.00%	1163	100.00%	380	100.00%	1782	100.00%	5998	100.00%

表4 - 2 : 「年齢」関係と「笑い」の統合2元表

	上上 +上	%	同	%	下下 +下	%	計	%
A1+A2+A3	57	4.56%	79	5.82%	57	3.50%	193	4.58%
B1+B2+B3	30	2.28%	14	1.03%	16	1.03%	60	1.42%
C1+C2	3	0.23%	3	0.22%	2	0.13%	8	0.19%
「笑い」総計	90	7.07%	96	7.07%	75	4.66%	261	6.19%
その他総計	1226	92.93%	1261	92.9%	1468	95.34%	3955	94%
総計	1316	100.00%	1357	100.00%	1543	100.00%	4216	100.00%

この結果、A類、B類の年齢における分布を見ると、A類は上の者、下の者に比して、同年齢の者の間に多く出現しているが、上か下かということでは上の者に比較的多く笑いかけるようである(「上上+上」 : 「同」 : 「下下+下」=4.56% : 5.82% : 3.50%)。B類は上の者に対して多く出現し、同年代の者と下の者の区別はつけないという結果であった(「上上+上」 : 「同」 : 「下下+下」=2.28% : 1.03% : 1.03%)。A類、B類2種(表4-2の太線部分)の χ^2 検定を行った結果、 χ^2 検定値は9.56であり、自由度2の χ^2 統計量の5%臨界値は5.99であるから有意の相関が認められた。

A類における「年齢」関係の比率の差の検定結果は以下の表4-3のようである。

表4 - 3 : 「年齢」関係とA類の比率の差の検定

		同	下下+下
		79 (5.82%)	57 (3.50%)
上上+上	57 (4.56%)	*1.75 > 1.65	0.87 < 1.65
同	79 (5.82%)	-	*2.70 > 1.65

「笑い」の分類に基づく数量的分析

結果、同年代の者の間の「笑い」と上の者に対する「笑い」の出現率の検定値は1.75であり、水準の臨界値1.65よりも大きい。また同年代と上のものに対する「笑い」の出現率の検定値も2.70で臨界値よりも大きい。しかしながら、上の者に対する「笑い」の出現率と下の者に対する出現率の検定値は0.87で臨界値より小さい。つまり、A類においては上の者、下の者に比して、同年代の者に多く笑うが、上、下の区別は検定上確認されなかった。

B類と「年齢」関係の比率の差の検定結果は以下の表4-4のようである。

表4-4：「年齢」関係とB類の比率の差の検定

		同	下下+下
		14 (1.03%)	16 (1.69%)
上上+上	30 (2.28%)	*2.54 > 1.65	*2.63 > 1.65
同	14 (1.03%)	-	0.01 < 1.65

結果、上の者に対する「笑い」と同年代のものに対する「笑い」の出現率の検定値は2.54であり、水準の臨界値1.65よりも大きい。また上の者と下の者に対する「笑い」の出現率の検定値も2.63で臨界値よりも大きい。しかしながら、下の者に対する「笑い」の出現率と同年代の者に対する出現率の検定値は0.01で臨界値より小さくほとんど差が認められない。つまり、B類においては同年代の者、下の者に比して、上の者に多く笑うが、同年代、下の区別は確認されなかった。

これらの結果からA類は同年代の者に、B類は上の者に多く出現するという両者間の出現特徴が確認される。

3 2 4. 属性によるA類B類の分布特徴

表5にそれぞれの関係におけるA類B類の分布特徴を示した。

表5 「親疎」、「場面2」、「年齢」のA類、B類の分布の特徴

	A	B
「親疎」関係	親	普通
「場面2」	雑談	ミーティング
「年齢」関係	同	上

以上のことから同じ「笑い」の中でもA類B類は対人相互関係においてまったく異なる出現傾向を示すことが確認された。つまり「親疎」関係において、A類：仲間づくりの「笑い」は親しい間柄に多出し、B類：バランスをとる「笑い」は「普通」の間柄に多出する。場面属性においてはA類は雑談、B類はミーティングに多く出現する。「年齢」関係においてはA類は同年齢の者に対して、B類は自分より年上の者に対して多く出現する。

4. 今後の課題

A類、B類が3種の発話属性において、異なる分布を示すことが数量的に実証されたことによって、本稿の主眼はほぼ達成されたと考える。しかしながら数量的に少数であるため検定対象となりえなかったC類および個々の属性を考えると今後データの蓄積が急務である。

また今回の類別認定基準はラベリングの作業を行うために仮に設けたものであり、基本的には今後ともこのような方向性を持つものであると考え、情報の内容と発話者の立場をより明確な整合性を持った新しい枠組みの中で形で決定することが今後の課題であると考え。

「笑い」の分類に基づく数量的分析

注1 分析対象となったデータは、現代日本語研究会編「女性のことば・職場編」に収録されたすべての自然談話資料発話11,233発話であり、そのうち「笑い」が出現するものは885件であった。このデータの収集は1993年9月から11月にかけて行われたものであり、19人の20代から50代の女性の協力者に職場でテープ録音をしてもらったものである。テープ録音を朝、職場についてからの1時間、会議打ち合わせなどの1時間、休憩時間1時間、の計3時間してもらい、そのうち資料として、まとまった談話のある10分前後を書き起こした。このデータ内には「あざけりの笑い」、「馬鹿にした笑い」といったものは出現せず、そのため分析対象となっていない。

注2 分類の詳細は早川(2000)参照

参考文献

- Ekman, P (1992) *Telling lies*. New York W. W. Norton
- 橋元良明(1994)「笑いのコミュニケーション」『言語』Vol. 23・No. 12, 大修館
- 早川治子(1994)「日本人の「笑い」の談話機能」『言語と文化』第7号文教大学言語文化研究所
- (1997)「日本人の「笑い」の談話展開機能2 出現率と場面」『言語と文化』第8号文教大学言語文化研究所
- (1997)「笑いの意図と談話展開機能」『女性のことば・職場編』現代日本語研究会編、ひつじ書房
- (1999)「自然言語データにおける「笑い」の数量的基礎分析」『言語と文化』第12号文教大学言語文化研究所
- (2000)「相互行為としての「笑い」」『文学部紀要』第14 1号文教大学文学部
- Heritage, J., (1985) "Analyzing News Interviews : aspects of the production of talk for an 'overhearing' audience" in T. vanDijk (ed.), *Handbook of Discourse Analysis*, vol. III : *Discourse and Dialogue*, Academic Press.
- Jefferson, G., Sacks, H. and Schegloff, E. (1987) Notes on laughter in the pursuit of intimacy. In G. Button and J. R. E. Lee (eds.) *Talk and Social Organization*. Gledwin : *Multilingual Matters*, pp. 152-205.
- 海保博之、原田悦子 (1993)『プロトコル分析入門』光明社
- メイナード 泉子(1993) 会話分析 くろしお出版
- 水川良文(1993)「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロゴス』17: 79-91
- 野村雅一、(1994)「変容する笑いの文化」『言語』Vol. 23・No. 12, 大修館書店
- Sacks, Harvey (1992) *Lectures on Conversation*, Blackwell

「文学部紀要」文教大学文学部第14 2号 早川治子

Stubbs, Michael (1983) Discourse Analysis : The Sociolinguistic Analysis of Natural language, Basil Blackwell

杉山明子 (1984) 「社会調査の基本」林知己夫編 『現代人の統計』朝倉書店

谷泰 (1987) 「会話の中の笑い」谷泰編 『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所

山口昌男 (1990) 『笑いと逸脱』ちくま文庫 築摩書房